
空ノトリカゴ

天宮 遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空ノトリカゴ

【Nコード】

N4653I

【作者名】

天宮 遙

【あらすじ】

王の住む空の城 それは、永遠の平和と繁栄の象徴。——その筈だった。***広大な砂漠の真ん中に、魔法の息づく小さな国が存在した。伝説は語る。荒れ果てた大地を前に一人嘆く若者がいたことを。若者は親友の魔導師になんとか豊かな土地に変えられなしかと相談し、魔導師は持てる力の全てをもって空に浮かぶ城を作り上げた。空の城は豊かな雨をもたらし、大地は命の喜びに満ちた。その日から永劫続く幸福の最中に居るのだと、少女は信じていた。

——あの日、其れに気付くまで。

序

今にも崩れ落ちそうな煉瓦の壁。歪んで窓枠に嵌らなくなった窓板。似たようなボロい家が幾つも立ち並ぶ路地に、今日も降り注ぐ、冬日の柔らかな陽射し。

柔らかな陰影で描き出された優しい空間に、あんなたちとつと働きな！もうすぐ時間だよ！と威勢の良い声が木霊する。

同時に、其処彼処からどたばたと賑やかな音が狭い壁と壁の間を反響する只中を、少年は一人全力で走って自分の家のある集合住宅に辿り着いた。

何度も何度も今日まで乱暴に扱われてきたのだろう、カーテンの方が余程役に立つとも思える扉を今日もまた走ってきた勢いそのままに力任せに蹴りを入れて行く道を開くと、これまたどんなに慎重に足を運んでもギイギイと盛大に悲鳴を上げる階段を、何のためらいも無く一足飛びに騒音を轟かせながら少年は駆け上がる。

二階、三階と螺旋階段を駆け登る少年に、下の方からカラカラと笑い声が追いかけて来た。

「お帰り。早く仕度おしよ？もうすぐ時間だしねえ」

「うん、わかつてるよ、おばさん！」

少年は元気良く答えると、残りわずかな階段を駆け上がって自分の家に転がり込んだ。

そのまま家にあるありったけの器という器を引っ提げると、少年は今度はアパートの屋上を目指す。

広く開けた屋根の上。そこには同じアパートに住む数人の子供達と若い母親が並んで器を屋上に敷き詰めていた。

その隣に立って、少年も同じように器を並べていると、先ほど階段で少年に声をかけた人だろう、恰幅の良い女性が屋上に上がってきた。

「よし、準備は出来てるようだね。ほら、チビども、ぴしっとして

ここに並びな！」

女性が号令をかけると、子供たちはきやいきやい騒ぎながら横一列に並んだ。

その横に少年も並んで遙か空を見上げた。

薄黒い雲の塊が、ゆつたりとこちらに近づいてきている。

それを見ながら、少年はほう、と安堵の溜息をついた。

「この早さなら、長めに雨が降りそうだね」

「良かったわ、これからの季節、何かと水が入用なもの」

「大瓶一杯に水が溜まったら楽になるさ。さあ皆、手を組んで、ちやんと祈るんだよ！城と、王様にありがとುತ್ತてね！！」

女性の掛け声に合わせて、子供たちはいっせいに跪いて熱心に祈り始めた。

少年も、若い母親も、子供たちの隣で深々と頭をたれた。

中年の女性は何やら感謝の言葉を呟きながらしつかりと空を見据えた。

彼らの頭上に、さああああ、と音がする。

町全体が白い薄煙に包まれる中、時折ぽつぽつ、とかき鳴らされる、命の音色。

その静かな音楽の中にあつて、彼らは身動き一つせずただ穏やかに身の内に喜びを感じ取る。

——見渡す限りの屋根の上で、似たような光景が広がっていた。

+ + +

広大な砂漠の中に、宝石のように美しい国が存在した。

伝説は語る。かつて、荒れ果てた不毛の大地を前に、一人嘆く若者がいたことを。

若者は魔法使いに相談し、魔法使いは持てる力の全てをこめて空に浮かぶ城を作り上げた。

空の城は、乾燥しきつたこの国の大地に雨を降らせ、潤いをもたら

し、広がる荒野は瞬く間に豊かな実りを育む豊穡の地となった。

——空の城がある限り、この国は平和で豊かな国となるう。

魔法使いの言葉通り、国には幸せが満ち満ちた。

若者は王となって空の城に住まい、魔法使いはその左に坐して王と城を守った。

城の下には恵み豊かな大地と穏やかに暮らす民。

何百年、何千年経とうと変わらぬ、平和な風景。

そして。

巡回航路に沿って国中を巡り、命の水を人々に施す天空の城の姿は、そこに住む王の姿と相俟って、人々から尊敬と崇拝を享受していた。

「可愛い私のジョゼフィーヌ、ほら、お人形をあげようか、それとも、甘いケーキが良いかな？なんでも言ってごらん、おじちゃまが全部叶えてあげよう」

セピア色にくすんだ風景の中で、白いウサギの愛らしい目がぎよろつとこちらを見ていた。

毛むくじやらなそれが近づいてくるのが嫌で、傍にいた人の服の裾を掴んで視界を遮ったのに、でっぷりと太った男はなおも布の壁を回り込ませるようにして人形をジョゼの視界にねじ込んでくる。

「ほつら、ウサギちゃんもネコちゃんも、可愛い可愛いジョゼフィーヌとお友達になりたいよーって言ってるよ」

嫌、イヤ、私そんなの欲しくない！私、そんなの要らない！どうして皆私がそんなの欲しいと思ってるの！？私何時そんなの欲しいって言ったの！？

お願い、来ないで！嫌ったらイヤなのー！！

——不意にひょいっと誰かがジョゼの体を抱き上げる。突然の事にビックリしてジョゼの目に滲みかけてた涙も引っ込んだ。ジョゼは大きな目を更に大きく見開いて、前の顔をまじまじと見詰めた。年は十二、三だろうか。ジョゼと同じ金色の巻毛を後ろで一つに束ねた男の子が、につこりと微笑んでいて。

「初めまして、我が姫。このクリスに姫のお望みをお伝え下さい。何でも叶えて差し上げましょう」

——言ってることは先ほどの男と同じ事なのに、何故だか不思議と安心できて、ジョゼはクリスにしがみついて思いつきり声を上げて泣き出した。

+ + +

隙間無く積み上げられた石の壁。或いは優美な曲線を描く真鍮の柵。王国成立当初からの国土だった旧市街地の華やかな町並みの中心に、ひとときわ広大な敷地を占める閑静な一角があった。

大きな石畳の道がその真ん中を貫いた、その片側に広がる大豪邸。輝かんばかりに磨き込まれた白大理石の壁と、そこに施された金装飾と。寸分の隙も無く手を入られた庭園には、幾何学模様を描くように水路が張り巡らされ、その両側には多量の水を必要とする園芸種の花々が色とりどりに咲き誇る。その水の全ての源、尽きることの無い豊かな流れを庭に注ぎ込む女神の壺から零れ落ちる流れが水飛沫をあげて虹を作り、吹き上げられた噴水が優美なアーチを形作りながら庭の小路を跨いで反対側へと空中を渡ってゆく。その水の天蓋がつくりあげる無数の煌きの下を、少女が一人、颯爽と黒いローブを翻して歩いて行く。

爽やかな庭の、爽やかな朝。しかし。

「——何たる不覚。あんな夢見るだなんて、寝覚め最悪」

少女——ジョゼの気分は爽やかさからは程遠かった。

よりもよって一番見たくない類の夢だった。

力が足りなくて、何も出来ずに自分の意思さえ伝えられず、拳句クリスに助けられて泣きじゃくった幼い日の記憶。ジョゼの一番古い思い出。

今ならあんな状況になりはしないのに、屈辱も良いところだ。

——疲れてたのだろう、疲れてたんだ、じゃなきゃあんな夢見るはずがない。

ジョゼが一人で勝手に夢の分析を終えたその時。

「おはようございます、お嬢様」

ジョゼの歩いて行く先に、男が一人、居住まいを正してたたずんでいるのに気がついた。

その姿を見止めて、ジョゼの片眉が少し跳ね上がる。

「おはよう、レイ。今日は一人？」

「ええ。クリス様より朝お迎えに来られないことへの詫び状が届い

ております」

そう言いながらレイは手紙というよりも辞書ほどもありそうな分厚い紙の束を差し出した。

「お読みになりますか？」

「——けっこうよ。どうせ齒の浮くようなコトしか書いてないもの」
うんざりしたように手をひらひらさせると、レイは紙束のかわりにずっしりと重たい革の鞆をジョゼに手渡した。

「では、行つてらっしゃいませ、お嬢様」

その声と同時に、ぎぎぎ、と音を立てて華麗な鳶模様を施された門が開いて行く。

その先にある黒い塊が一斉に色めき立つのがジョゼからはっきり見えた。

(……………逆玉しか頭に無い馬鹿どもが！)

ジョゼはきゅつと唇をかみ締めるとずんずんとその群れのど真ん中に向かって歩き出した。

「おはようございます、ジョゼフィーヌ姫！」

「進級おめでとうございます、姫！」

「最高学年へと進まれて今年もなお一層姫の御活躍をなさることでしょう！」

「私の父も姫に一言御挨拶を申し上げたいと……」

「今宵は我が屋敷へ！」

「いいえ私の元へ！！」

「我が家ではささやかではありますが心の籠ったお祝いを用意してございます！」

やいのやいのと黒い群れを形作る男たちが一斉にジョゼに話しかけるが、それらを虫の羽音の如く無視して、ジョゼは一直線に歩き、太い道を渡ろうと試みる。

——この朝の儀式が始まって八年目。突っ切る方も、突っ切られる方も、もう慣れたものだ。

最初暫くの間は動くことすら出来なくなつて周りを怒鳴りつけて

道をあけさせたりしていたが（そしてもなくそれをレイに見られていて帰ってこつてり礼儀作法の復習をさせられたが）時がたと共にジョゼの背も伸び、取り囲まれる状況にも慣れ、今ではずんずか立ちはだかる人間にぶつからん勢いで歩いていく。

当然、どちらに非があろうとぶつかるものならジョゼの不興を買うことは間違い無いので御機嫌取りの連中も一歩引く。そこを更に詰める。更にもう一歩。

そうやっていつものように微速前進する集団の一人が不用意にも誰かにぶつかりよろめいた。

「なんだ君は！少しは周りを見て歩きたまえ！」

大層な格好をした少年は、体面を取り繕うために高飛車な態度を取った。が、それは相手が極悪に悪かった。

「——そいつは俺の言葉なんだが……」

ごく低音の絶対零度の声音がした途端、ジョゼの周りに貼りついていたり取り巻きたちは一斉に蜘蛛の子を散らすごとく去っていく。一気に開けた視界の先に顔なじみを強制的に見つけさせられるとジョゼは顔面の筋肉と曰ごろの淑女教育の努力の結果をフル活用してなんとか笑顔を取り繕った。

「あら、アラムじゃない、おはよう」

「挨拶より取り巻きの教育ぐらいしやがれ、このクソ餓鬼。お前のせいで周囲が被害甚大だ」

「またそんなこと！私のこと『クソ餓鬼』だなんて汚い言葉で罵らないで！！」

ジョゼの笑顔は一瞬で吹っ飛び、正面で冷ややかに見つめる男——アラムに食って掛かった。

アラム・ベリエル。この学校でその名を知らない者は居ない。

その理由は——

「ガキをガキ扱いして何が悪い！しかも人様に迷惑かけるようなガキはクソ餓鬼でも上品過ぎて涙が出るぜ！！」

「私が何時貴方に迷惑かけたのよ！ぶつかったのは私じゃないでし

よう!？」

「お前の御機嫌取りしようとして俺にぶつかったんだ!十分お前のせいだろうが!」

ぎゃーぎゃーと罵り合いながら二人の周りにじわりじわりと魔法陣が引かれていく。

その魔法の効果の物騒さときたら、少しでも魔法を勉強したことのある人間だったら脱兎の如く逃げ出すところだ。

寄ると触ると今と似たような展開になる二人。『混ぜルナ危険』のレットルを貼られてしまった組み合わせが鉢合わせたところに共に居られるのは、危険感知能力が欠如しているとしか思えない、いやむしろ危険よきたれ!と待ち構えて楽しんでいる変態ぐらいしか考えられない。

いつもは誰かがとばっちりを被るか敢えて火中の栗を拾いに行く勇者が何とか被害最小限にコトを収めて平穏な時に戻るのだが、今日はジョゼが自ら一步引くという奇跡的譲歩を見せた。

「まあいいわ、今日のところは譲ってあげるわ。だって後もう少ししたら貴方が泣く姿が見られると思うと楽しみすぎて背中に羽根でも生えて飛んでいきそうよ」

ジョゼがくるん、と指先を回すと小さな白い羽根の幻覚が背中に現れた。御丁寧にパタパタ羽ばたいている幻影を目にして、アラムは鼻でそれを笑い飛ばした。

「頭がぶつ飛んでる奴に今更羽根なんざいらんだろう。それに、泣くのはお前だ。先月の学年末試験の俺の出来は過去最高だったからな。お前にデカイ顔させておくのも後少した」

「あら、その台詞もう何度聞いたかしら?結局一度だって八歳も年下の私から学年主席の座を奪えずにいるじゃない?そろそろ、負け犬の遠吠えは聞き飽きたわね」

「なっ!」

「残念ながら総代として今日の入学式で挨拶するのは私よ。ちゃんと素晴らしいスピーチまで考えてきたんだから、アラムは壇の下で

有象無象の中にまぎれて私を眺めていると良いわ」

「そっくりそのまんまお前に返してやるぜ、ジョゼ！」

あからさまなジョゼの挑発に乗って一瞬のうちに先ほどまでとは比べ物にならないほどの物騒な魔法陣を辺りに張り巡らせつつアラムが吼えた、その時。

「相変わらずですな」

気まぐれ勃発な災害と化した二人に近づける数少ない人間がひゅん、と空中に姿を現した。

「学院内の魔法陣の分布を感知すればお二人の居所がたちどころに判るのはなんとも便利なもんですな。ですが、破壊活動はお控え下さいますように」

「校長！」

「アーデガルト先生！！」

吹けば折れそうな小柄な人影——二人の通う学校の校長であるアーデガルトを、ジョゼとアラムは同時に振りかえり、そしてずんずかずん、と並々ならぬ熱意を持って詰め寄った。

「先生、この間の学年末試験、誰が主席だったんですか！？」

「校長、ジョゼに遠慮することなくびしっと言ってください、びしっ——！」

ぎらぎらと闘争心を剥き出しにして意気込む若い二人を頼もしげに眺めつつも、その問いに直接答えることなくアーデガルトは予定通りの言葉を紡いだ。

「ジョゼファイヌ・アナリマリア・ラ・ブリユイエール、ついてきなさい」

——その瞬間、ジョゼは目を輝かせ、アラムはガクつと項垂れおちた。

「じゃあね、アラム。また後でね」

落胆のあまり声も出ない年上の同輩をふふんと鼻でせせら笑い、ジョゼは手をひらひらと振ってアーデガルトと共に大聖堂の方へと去っていく。

その後姿を見送りながら、アラムは絶叫した。
「また負けた！！」

+ + +

王立魔法学校。

国中からえりすぐりの才能が集まる楽園。

魔法無くして成立しえなかったこの国において、魔法使いは手厚く保護されてきた。

縁故と賄賂が物言う国の行政官や平和すぎる国内情勢のために今ひとつ存在感と発言力に欠ける軍とは違い、持てる力の強弱こそが唯一の存在意義と言い切る魔法使いは一般庶民が唯一人生の一発逆転を狙える道だった。

魔法は誰もが使えるが、真に強い力を持つものは数少ない。

そしてその強い力を発揮するには複雑な魔法体系を理解する聡明な頭脳と自らの力に飲まれないだけの強い意思が必要で。

逆に言えばその全てを兼ね備えた稀なる人間は空の城に上がり、王宮付きの魔導師として一気に栄耀栄華への道が開けるのである。

そしてジョゼとアラムは、本人にとっては幸運なことに、そして周りにとっては不幸なことに、まず間違い無く、王立魔法学校の長い歴史の中でも屈指の才能を持つ人間だった。

『学生総代、挨拶』

魔法で音量をあげられた声が厳かに式次第を読み上げると、それに応じて華奢な印象の少女が壇上に上がった。

その姿を目にするや否や、アラムは反射的にギリッと音を立てて歯を食いしばる。

同時に、周囲の人間が彼女に熱い視線をおくった。

『……本日より始まる貴君らの学生生活がより豊かで実りあるものとならんことを。学生総代、ジョゼフィーヌ・アナ＝マリア・ラ・ブリュイエル。』

最高学年に進級し、名実共に学校の最優秀の学生となったジョゼが誰もが注目する中入学式で在校生の代表として壇上で挨拶する。それを、僅差で敗れたアラムが『今年こそ追い抜いてやる』という誓いをたてながら睨みつけた。

そんなアラムを知ることもなく、壇上でジョゼが金の巻き毛を揺らしながら優美に一礼すると、アラムの周囲、――否、講堂中の人間が割れんばかりの拍手喝采をおくった。

……その音は、今年もまたジョゼのご機嫌取りをしようと待ち構えている人の多さを如実にあらわしていて。

軽く耳を塞いで聴覚を保護しつつ、アラムは溜息をついた。

どうやらジョゼと言う名の玉の輿にあわよくばと思うものには、あのキツイ性格の彼女が虫も殺せぬ、扇以上に重いものなど持てもしない儚い令嬢に見えるらしい。

ブリュイエルの名が人々の目を晦ませるのか、ジョゼが一応は猫をかぶっているのか、兎も角人間の妄想力の底の無さを実感してアラムはそつと講堂を抜け出した。

少し歩いて万雷の拍手が遠くなってくると、耳を塞いでいた手はずし、ほっと一息について角を曲がった。その先に一点の染み一つ

なく白一色に磨き上げられた回廊が目の前に現れる。

円柱のみが規則的に配された幅の広い廊下のそこにテーブルと椅子が配された静かな空間。いつもなら思い思いの場所に研究者や学生が陣取って熱心に討論や読書に打ち込むこの場所は、学院の叡智の源として誰もが愛していた。——無論、アラムも。

今日も今日とてここで暫く読書をしながら式典が終わるまで時間をつぶそうと思い立って回廊の一角に陣取り、鞆の中から読みかけの本と今朝母親に持たされたプリンを取りだしながら、ふと回廊に囲まれた中庭に目をやった。

大きな噴水を中心に作庭された回廊の中庭。水を大量に必要とする噴水は、ジョゼの家のような水を豊富に享受出来る大貴族の庭か、魔法学校のような公共施設にしか作れない。その噴水を源とする水路の両側にはこれまた水をたくさん要求する園芸種の花が咲き乱れ、回廊の反対側の屋根の上からも花々が可憐な顔を覗かしている。その屋上庭園にもきめ細やかに水路が廻らされ、至るところで階下に流れ落ちてせせらぎという名の軽やかな音楽を提供していた。

差し込む日の光と、揺らめく水飛沫。透き通る美しさのその向こうに、アラムは不意に友の顔を見つけてしまった。

「クリス！」

「やあアラム、もう入学式は終わったのかい？それとも、お得意のサボりか？」

人のよさそうな笑顔を浮かべて回廊の向こう側から近づいてきたのは、クリステイ・セドリック・セバルカンティ——突発的災害と化すジョゼとアラムのいがみ合いに臨席できる数少ない一人だった。とりあえずアラムはもう一つあったプリンをがさこそと鞆の中から取り出してクリスに差し出し、向かいの席を勧めた。

「サボりの方だよ。あんな退屈な式出てばけつとしてるより本でも読んでようと思って抜け出てきた。クリスこそ、どうしたんだ？遅刻なんて珍しいじゃないか？」

渡されたプリンをありがたく頂戴すると、クリスもアラムの正面に

腰掛けた。

「それがねえ、色々今晚の準備が忙しくてね。昨日中に終わらなかつたんだ」

「今晚？」

何かあったか？と疑問符を頭上に沢山並べたアラムにクリスは説明を付け加えた。

「忘れたのかい？今日は城で王子の立太子の礼があるって」

「ああ、そう言えば。ま、唯の一般庶民には関係無い話だけど」

冷ややかに一蹴したアラムに苦笑して、クリスはパクッと一口プリンを頬張った。

「うん、美味しい。流石、君の母上は料理上手だね。このために昨日は家に帰ってたのか？」

「それだけじゃなくて、昨日はうちの地区で雨が降る日だったんだよ。寮に入ってるせいで母さんに一人暮しさせちゃってるし、雨の日はどれだけ人手があっても足りやしねえ」

アラムもクリスと同じようにプリンにぱくつくと片手で本のページをぱらりと捲った。

「毎年城の巡回航路は更新されるけど、それでも国の端っこの方は慢性的な水不足だ。この庭に使われてる水をスラムに持っていきたいところだけど、それも言っても始まんないしな」

「ま、とつと君は上へ駆け上って自分の住んでる地域だけでも助けてやるんだね。結局のところ、城の巡回航路なんてそういう政治の駆け引きのうえに成立してるんだし、僕はのために君への協力は惜しまないつもりだけど……」

クリスは不自然に言葉を打ちきっていたずらっ子のように笑いながらアラムを見つめた。

「学年末試験はどうだったんだい？式典サボってここに居るって事はもしかして……」

「ああ！ジョゼにまた負けたよ！！」

心底悔しそうに齒軋りするアラムの表情を見て、クリスは笑いを押

し殺すのに失敗した。

「で、また姫に毒でも吐かれたと」

「信じられるか、俺は今回満点だったんだぞ！あの極悪な学年末試験で！なのにあのクソガキは満点取ったどころか魔法陣の構造理論の試験で設問されている以上に考察書いて、しかもそれが先生の研究に一役買ったとかでボーナス点！なあ、俺、そろそろキレて良いよな！？」

身振り手振りを交えて大真面目に訴えかけるアラムを、クリスはのほほんとやり過ごした。

伊達に入学以来丸七年友人をやっているわけではない。ジョゼとアラムと一緒に居合せるという危険領域を何とかしてしまうのは大概クリスの役目だった。——そのせいで周囲から異常人物、変人奇人、昼行灯に無神経生物、敵に回せば心強いが味方になったら恐ろしい、などその他ありとあらゆる称号を欲しいままに与えられてしまう羽目になってしまったが。

「ま、アラムも頑張ったと思うけど、姫も姫で試験に命賭けてるからねえ。休みの間中、姫は『今度こそアラムに抜かれちゃったかも……』って青ざめてベッドで震えながら泣いててね」

ふう、と溜息をついて頭を振るクリスに対し、アラムは耳を疑った。自分に対してはあの傲岸不遜、自分の我侭が通らないはずがない、天上天下唯我独尊みたいな態度しか向けないあのジョゼが、青ざめて涙！？

「……マジかよ？」

「嘘に決まってるじゃないか、アラムはホント騙されやすいよね」さくつと否定されてアラムは体中から力が抜けて机に突っ伏した。その頭上にそこから摘んだ花をお供えしてやりつつ、クリスは独り言のように呟いた。

「ま、姫が試験に命賭けてるのは本当だけだね。姫が御入学遊ばされたときの一族のお歴々との約束はまだまだ全然十分生きてるから」そう言っただけクリスはそつと目を閉じ昔のことを思い出した。

『一度でも学年首席を維持できなければ即退学アンドそこの馬鹿なボンボンと即結婚』

それがジョゼが学校へ入学するときの条件だった。

その約束が取り付けられたときの状況を、クリスは今でも鮮明に覚えてる。

ジョゼの家、ブリュイエール家といえば国中で知らない者はない名家だ。

空の城を建造し、国開きの魔導師という称号を与えられた伝説の魔法使いを祖先に持ち、常に王座の左で国と王を守ってきた。

貴族の頂点に立ち、王に次ぐ地位を恣にしてきた一族の、その当主ともなれば揮える権力はいかほどのものか。

そんな家のたった一人の総領姫として、ジョゼの周りには物心ついて以来毎日のように様々な人間が様々な方法でジョゼに取り入ろうとして取り巻いていたが、幸運なことにジョゼはそのことに思いあがるほどには馬鹿ではなく、不運なことに彼らの目的が自分ではなくブリュイエールという家の名だということに気付くほどには賢かった。

頭の中をドコからドコまで探しても、ジョゼと結婚すれば貴族の頂点は俺様のモノ！という言葉以外出てこない馬鹿な親族の相手をするのには彼女の堪忍袋の緒が切れたのは八年前。

一族の中でも長老、古狸たちが居並ぶそのまん前で、わずか八歳の少女は将来の一族当主になる者——つまりは、皆が考えるところのジョゼの夫の条件として、彼女以上に魔法に長けている者という条件をつきつけた。

国開きの魔導師を祖先に持つブリュイエール家が魔力の弱い者を当主に据えるのは後世に残る家の恥だと訴え、自ら当主としてたつ為に魔法学校に進学すると主張した少女に対し、一族は仮にもブリュイエールの名を戴く者が魔法学校で主席から落第するのも同じ位の恥だと反論し、そこで協定が結ばれた。

魔法学校に在学中の八年間に、ジョゼが主席から一度でも落ちれば

一族の意見に沿って婿どりをすべし。逆に八年間首席を守り通し晴れて王宮魔導師となる資格を得たならば、ブリュイエル家の家督はジョゼが継ぎ、一族はジョゼに二心無く仕えるべし。

——この協定が結ばれたとき、クリスもブリュイエル一族の末席に連なるものとして、また十も年下の少女の婿候補として居合わせた。

以来、丸七年間、ジョゼの傍でブリュイエル一族による執拗な妨害行為や、その全てを薙ぎ倒して我が道を進んでいく彼女を見つけてきた。

そして、ライバルとして、アラムも。

「全く、あほらしいにも程があるぜ。ブリュイエルの当主、王国の守護神、ンなもん、どうだって良いじゃねーか。てめえらには元々十分な富も権力も水も両手に有り余ってるだろ。更に欲しがる馬鹿は自分で乾いたことの無い能無しだ。銀のスプーン口に啜えて生まれてきた奴等は自分の身の丈以上に潤ったってなんにもならないって事を知らない戯けばかりかよ」

「君も言うねえ、アラム。僕も一応、銀のスプーン啜えて生まれてきた口なんだけど。ま、姫の言い分については可愛い我儂なんだし少しは判ってやってよ」

「クリスは別。あのガキは自分の我儂が他人にどれだけ迷惑か判ってない時点で可愛くない！」

「可愛いもんだって。ブリュイエルの名誉と権力を運んでくれるのだったら人形でも子豚でもそこらに落ちてる石でもなんでも構わないって思ってる人間に『私を見て！』って駄々こねてるだけなんだから。僕には今でも姫が初めて会った三歳のころと変わりなく見えるね」

そう言ってフツと笑ったクリスの微笑みの冷たさにアラムは背筋に冷水を浴びせ掛けられた感じがした。——しかし『これ』でもジョゼに最も好意的な親族であることに間違い無い。他の一族の者がジョゼをどのように扱っているのか、想像に余りある。

だが、アラムも人のことに同情している余地は無かった。——クリスがそれまでの空気を振り払うようににっこりとアラムに微笑みかけてくる。

「それよりアラム、今年こそ頑張つてね。一族の小父様方は今のところ君のことを姫を主席から叩き落せそうな唯一の人間として好意的に見ているけれど、そろそろ本当に主席取らないと小父様方に恨まれちゃうよ。姫をこのまま主席で卒業させようものなら、小娘一人負かすことの出来ない腑抜けって評価されて目の仇にされちゃうかもしれないし。権力と人脈だけは余りある小父様方のことだから逆恨みで君の将来スタボロにしちゃうくらいやりかねないからね」何気なくを装ったクリスの言葉に、アラムは盛大にプリンを吹き出しかけた。

冗談じゃない。国を牛耳るブリュイエール一族に本気で睨まれたりしたら三日でこの世とサヨナラしたくなる目に遭わされるに違いない。

「……なあ、『まだ』逆恨みはされてないんだよね？」

「うん。一昨日のパーティーでの感じではね。でも頑張つてね、うちの一族、言っちゃなんだけど欲得がらみは異常なほどの行動力を示すから」

うつげえ、とうめき声を上げて撃沈したアラムの頭のその向こう、回廊の入り口に一体何を見たのかクリスは突然たちあがり、そして指をばちんとはじくと自分の金の髪を縛っていたリボンの色を紺色から深緑色へと変化させた。

——一連の動きを突つ伏したまま感知したアラムは、しぶしぶと起き上がった。

この動作をクリスが行うときは、お決まりの如くあの儀式が始まるのだ。

アラムの視界の隅で小走りに走っていったクリスが跪き、その向こうに彼が今変えたばかりの色と同じ色のリボンをつけた金の髪の少女が居るのが見えた。

「おお姫、お久しゅうございます、姫の第一の下僕にして最も従順なる奴隷、クリステイ・セドリック・セバルカントイ、ただ今御前に参上いたしました！」

朗々とした声を張り上げ、回廊中に口上を響かせたクリス——ジョゼさえ関わらなければ全くもって普通の人間に分類できるのに、少女が関わった瞬間何もかもを投げ捨てて彼は彼女専用の吟遊詩人と化する。

その変貌振りは猫を被るとか性格が変わる、などと言う言葉では生温い、絶対に人間が交代しているに違い無いという評判すら立てられるほど。

「ああ、本日の姫は何時にも増してお美しい！私がお傍を離れていた間に一体何事があったのか！いやそれを詮索するのは奴隷の身にはおこがましいこと、大変失礼をいたしました。それよりも今朝はお迎えに上がれなかったことをまずはお詫び申し上げねば！私としましたことが姫の大切な日にお迎えに上がれなかったとは何たる不覚、あまりの事態に絶望し衝撃のあまり自らの涙で溺れ死ぬところではございましたがこうやって恥を偲んでまいりました。姫、どうかこのクリスめに折檻をお与え下さいませ！」

「けっこうよ。それにクリスに何時もお迎えに来てと頼んだ覚えはないわ」

ジョゼがきっぱりと言いきると「そうでしたこのクリスが勝手に姫の御前に馳せ参じていただけのことですのに更に姫に叱責戴こうとは何たる傲慢！」とまた怒涛の如く語り出すクリスをその場に置いておいて歩き出したジョゼはすぐ先にアラムがいるのに気がついた。「あら、アラム、貴方こんなところに居たの？もしかして私に負けたのが悔しくてこんなところで式をサボってたのかしら？」

無邪気に凶星を指されて、アラムは眉間のしわを一層深くしながらプリンを大きく掬いにとって口に運んだ。途端、ジョゼの目が好奇心に輝いた。

「あら、何を食べてるの？なんだかクレームブリュレに似てるけど

ちょっと違うわね」

「姫、それはプリンと言うものでございます」

いつのまにか置き去り状態から復活したクリスがジョゼの真横に現れて質問に答えると、ジョゼが傍目にも判るほど興奮した面持ちでプリンを凝視した。

「プリン！？私知ってるわ！うちのシェフが教えてくれたの、庶民版のクレームブリュレでしょ？生クリームと卵黄から作る濃厚な生地パリパリの薄い飴で表面をコーティングしたブリュレと違って庶民にも馴染みやすいようカaramel化する手間暇省いてカaramelソースで代用、使わない筈の卵白を勿体無いからって増量のために利用して、材料費を押さえるために高い生クリームを牛乳に代えた庶民の悲しい努力がここぞとばかりに味わえる一品よね！？」

「さもない庶民の血と汗と涙の結晶レシピで悪かったな！！」

庶民出身のアラムが一瞬で沸点に達して食って掛かるうとするのを気にも止めずに、ジョゼはあくまで自分の欲望に忠実に行動した。

「ねえアラム、お行儀の悪いことだと思うかもしれないけど、貴方のその食べかけのプリン一口ご相伴にあずかって構わないかしら？だってこんなこと滅多に無いんだもの」

こんなこと即ち庶民の食べ物をお口にすることだと言うことに気付いたアラムがもう一度怒鳴ろうと息を吸い込んだ絶妙な間隙に、クリスがすつとジョゼの目の前に自分の食べかけのプリンを差し出した。「ああ、姫、私のでよろしければこちらをどうぞ存分に味わってください！」

「まあ、構わないの？」

「もちろんですとも、このクリス、かようなことでしか姫のお役に立てないこの身が恨めしゅうございます」

立て板に水を流すかのごとくとめどなく言葉を紡ぎつづけるクリスに完全に毒気を抜かれて、アラムはへなへなと椅子に戻るとまた本を読み始めた。

その隣で貴族二人の社会体験の如き時間が流れていく。

「あら、これ美味しい。クレームブリュレは表面の飴を割ながら食べるのが面白いのだけれど、プリンを食べた後じゃせつかくのあの滑らかな舌触りを殺してしまっているように感じてしまうわね。それにこの触感も面白いわ。ブリュレと全然違うの。私こちらの方が好きかも。今度料理長に作るように頼んでみようかしら」

やめておけ、格式ある料理を作ることに人生かけてきた料理人が聞いたらまず間違い無く世を儚んでしまうぞ、と心の中で突っ込んだアラムの耳に、頭上から降り注ぐ鐘の音が容赦無く襲いかかった。

「やつべ、予鈴だ」

「大変！ホームルーム！」

慌てて三人でテーブルの上を片付け、アラムはさっと本を取り上げて席を立った。

「行くぞ、これから爺さんたちのありがたい説教教室で聞かされるんだろ？」

「だね。では、姫、参りましょうか」

クリスはジョゼに手を差し出してさりげなくエスコートしつつ、アラムとの間に割って入った。——これぞ学内の平和維持活動の地道な第一歩。

「爺さんたち、今日の説教なんだって？」

「卒業論文のことじゃないかな？最終学年の初日だし。アラムはテーマは決めてるのかい？」

「ああ」

クリスが微笑んで話を向けると、アラムはちょっと鼻をこすりながら明後日の方向を向いた。

「魔術の医療技術転用について、かな。魔道具を人体内に埋め込んで人体の一部として代用とかできれば、もしかしたら母さんの身体も良くなるかもしれない」

「まあ壮大な目標ね」

クリスの逆側でふん、と鼻を鳴らす気配がした。

「王宮魔道師が何人も何年もかけてまだ進展してない難しい研究だもの、結果が出なくても落ち込まないようにな」

「何だよその結果が出ないに決まってるって決め付けた態度は！」

「まあまあ、アラム」

つんと顔を背けたジョゼに食ってかかろうとするアラムを押し留めて、今度はジョゼの方を向いた。

「姫は何かご希望などはあるのですか？」

「私？私は……雨、かしら」

「雨！？」

クリスとアラムがぎよつとした風に同時にジョゼの顔を覗き込んだ。
「おいおい、正気かよ？それこそ千年も解決できてない難問だぞ？」

「分かってる、だけど今の状況だと辺境部じゃ水が足りなくて困るところもあるんでしょ？必要な時、必要な所に、必要な量だけ城に頼らず雨を降らせられたら、皆嬉しいじゃない？」

ジョゼはむつとして頬を膨らませながら視線を下に向けた。

難しい問題なのは判っている。史上最高の魔道師といわれる自分の先祖筆頭に歴代の名のある魔道師たちに真つ向勝負を挑むようなものなのだから。

それでも、ジョゼの脳裏を離れないものがある。

かつてたった一度だけ、アラムの家を訪ねたときの光景。

そこはジョゼの家の何処にも無いほど、……それこそ、使用人棟よりも質素で簡素で、有体に言えばボロい家が立ち並ぶスラム街で、人々は城が巡ってくるたびに水を確保しようとする雨の中をずぶ濡れになって走り回っていた。

——水なんて、放っておいても集水システムが勝手に貯蓄してくれるものだと思っていた。

後でレイに聞いたところ、そんな事は庶民の間では極当然のことなのだという。

庶民でも裕福なところは共同で集水システムを共有して手間を省い

ているが、大半の民草は生きていくのにかつかつの量を何とか確保している、と。

長い歴史の中少しでも生存可能領域を広げようと度重なる城の軌道修正の積み重ねの矛盾が全てヒエラルキーの最下層に存する人々に降り注がれているように思えて仕方がなかった。

自分の先祖が構築した降雨システム。そのせいもあるのかもしれないけれど、何とかできないのか、ともう何年も一人で考えていて。

「ずっと、卒業研究には雨をテーマにするって決めてたのよ、私」

「流石は姫！壮大にして遠大、且つ民の為を想った崇高なお志、なんと云うお優しい御心！私の心は今、感動の嵐にうち震えております！」

クリスが大袈裟に感激する横で、アラムはふん、と鼻を鳴らした。「お前のほうこそ、それこそ出来んのかって感じだぞ？」

「やって見せるわよ！これは、私の、御先祖様への挑戦でもあるんだから！！」

「精々頑張れよ。ま、お子様の宿題程度じゃ絶対に解決できないレベルだからそれこそ結果でなくても落ち込むなよ」

「アラム！また私のことをお子様って言っただね！？訂正しなさい！」

ぶんすか怒るジョゼのご機嫌をとりつつ、クリスたちは今年一年間根城にする新しい教室に入って、新しい学年のスタートを切った。

夜空にぽっかりと浮かぶ三日月。その隣に寄り添うように輝く淡い空の城。

まるで御伽噺の挿絵のような光景のその中では、今まさに御伽噺のように煌びやかに王子の立太子式と、それを祝う舞踏会が行われているのだろう。

——だが、そんなことは今地上のお屋敷の一角でカリカリとペンを走らせるジヨゼには全く関係のないことだった。

「よって、本式により求められる命題の構造式が成立することが証明された、と。日に日にレイの出す問題が極悪になっていつてる気がするわ」

ジヨゼはインクの跡も鮮やかに紙一杯に文字を記し終わると、机から顔を上げた。

ジヨゼの日課の一つに、レイがよこす問題を解くことがある。

ブリュイエル家の数居る使用人の一人に過ぎないレイだが、ジヨゼの物心ついて以来『お嬢様』の魔法教育を一手に引き受けていた。その能力の優秀さは生徒であるジヨゼが王立魔法学校で主席を死守していることから窺える。だが……

「私は、魔法学校の最高学年の主席よ？あの学校で一番優秀な生徒なのよ？なのにどうしてレイは私にも手におえないような問題出しつづけられるのよ？」

最近の問題の難解さにジヨゼが小さく毒づいた。そりゃ、この間の試験は危うくアラムと満点で同点一位となってしまうって一族の狸爺どもに難癖つけられて退学させられかねなかったところをレイが何時も出してくれる問題のおかげでボーナス点をもらいなんとか回避できたが、それとこれとは話が別だ。はつきり言っただけレイの能力は不可解且つ理不尽、ていうかありえない。

「人を不審な物体のように言うの止めていただけませんか？」

何時の間にか、手に夜食を持ったレイがジョゼの部屋の入り口に控えていた。

どうやらジョゼの脳内の眩きが外にだだ漏れになっていたらしい。なんという恐ろしいことをしでかしたのか。背中に冷や汗をかきつつとりあえず長年の勘で流す方向に舵をとってみた。

「あら、そんなに悪い風に言った覚えは無いわ。ただ、レイはこんなに優秀なのに、どうして王宮に上がらずにうちで使用人なんか収まってるのかと思ったのよ」

「私の能力を評価していただけたのは嬉しいですが、お嬢様、私昔にちゃんと教えましたよね、力の強い魔法使いの条件を」

冷やかな視線を投げかけつつけるレイの問いかけに、ジョゼは小さく頷いた。

強大な力を有する魔法使いの条件、それは……

「高い潜在能力、明晰な頭脳、そして強い意志の力、よね」

「その通りです。自らに備わる魔法の力を十分に発揮するために必要な、複雑な魔法体系を理解する知性と、暴走しようとする力を押しとどめる理性の手綱。どれひとつとして欠かすことの出来ないものです。確かに私は潜在能力だけなら十年に一度の逸材と期待されましたし、魔法体系に関しては現在存命のどの魔法使いよりも深く理解している自信がありますが、如何せん意志の力が足りなかったのですよ。面倒事が大嫌いで、易きに流れるこの性格。我ながら、大きな魔法を揮うには適性ゼロの自信があります」

自信満々に自慢にならないことを言いきったレイから視線をはずしてジョゼはレイの持ってきた夜食にぱくついた。

レイは何時もこうだ。たとえ大きな魔法を使うことが無理でも魔法解析などの研究分野では引く手数多、最高峰の研究者となりうる能力を有しているのに、それをあっけなく放り出してたかが使用人風情に落ちついた。理由は、一々どうしようか考えて研究しなきゃいけない学者よりも何をしたら良いのか大体決まってる使用人のほう

が面倒くさくなくて楽だから。

おかげでブリュイエル家は当代最高の家庭教師を手に入れることに成功したが、レイを指導したこのある教授たちは今でも時折ジョゼに愚痴をこぼすほどだ。

「ああそうそう、レイ。私、卒業論文の課題、雨の研究に決めたら」

ジョゼが淡々と宣言すると、レイはあからさまに顔を顰めた。

「……何よ、何か文句でもあるの？」

「いえ別に。ただ、面倒なことになりそうだな、と」

「何故？私の研究課題がなんであろうとレイには関係ないでしょう？」

「関係大有りです。せっかくあの学校を出てのびのびしていたのに、お嬢様の研究の指導教官として近日中に魔法学校に緊急召還されるが予想されます。ええ、絶対」

「レイが私の指導教官役？そんなのいやよゼツタイ！家でも学校でも息抜きできなくなっちゃうじゃない！！」

「その分野の研究者は余り居ないんですよ。城と雨の研究は国の根幹に関わる分野。研究対象が城そのものである以上、下手な者に研究させて何かとんでもない間違いを犯されるわけにはいきません。ですから、城の研究は王宮からの許可制になります。今存命の魔導師の中でその許可を得ているのはわずか数名。殆どよぼよぼの老いぼれ爺ですからね。お嬢様を口実にこれ幸いと引きずりもどされるのが目に見えています」

はあ、とひときわ大きく溜息をつくるとレイはジョゼに嘆かわしげな目線を送った。

「やっと面倒事から逃げ出したと思ったのに、そんな課題を決めてくるとは一体どこでお嬢様の育て方を間違えたのか。恨むべくは過去の私ですかね」

「失礼ね！人を失敗作のように言うのは止めて！！」

きいいいいっ！と齒軋りしてジョゼが反論した、その時。

この屋敷にしては珍しく、——メイドとして厳しくしつけられている人間ばかりなので本当に珍しく、どたばたと走る音がして荒々しくジョゼの部屋の扉がノックされた。

「お嬢様、今すぐお召し替えを！ラッコット侯爵、セバルカンティ伯爵他数名の方がお嬢様に今すぐお会いしたいと……！」

「小父様たちが？こんな時間に？」

訝しげに首をかしげてレイを見ると、彼も彼で肩を竦めてみせた。心当たりは無いらしい。

今名のあがった人間はどれもこれも一族の中でも長老だとか重鎮だとかいう言葉が似合う種類の人間だ。今日も今日とて城で行われている祝宴にも出席中だったはず。

なのに、その大事な宴を中座してまでジョゼに会いに来るだなんて、一体何事があったというのだろうか？

「……まあ良いわ、会えばわかるもの」

そう、一つ大きく溜息をついてジョゼは着替えるからとレイを部屋の外へと追い出した。

細やかな彫金の細工の施された白い大きな扉の前で、ジョゼは一つ大きな深呼吸をした。

扉の向こう側は夜も更けてから突然現れるという非礼を悪びれることなくやってのけた一族の長老の皆様方が揃う応接間。そこから間断なく無遠慮にデカい笑い声が轟いてくる。……つまりは、完全にできあがってるジジイども多数。

腹に力をこめて無理やりに笑顔を作ると、ジョゼは一気に扉を開け放った。

「こんばんは、小父様方。こんな夜遅くに急に訪ねてこられるなんて、一体どうなさったの？」

予定の言葉を述べて首を傾げつつ可愛らしさを残したあどけない表情を三秒キープ。耐えて、耐えて、耐えて、そして。

「おお、私の可愛いジョゼフィーヌ！もっとよくその可愛い顔

を私に見せておくれ」

一番でつぷりと太り、赤ら顔具合もぶつち切りで一番のラ「コット侯爵がジョゼに近づいて肩を抱いた。顔にかかる息が酒くさくって思わず眉を顰めそうになる。

（耐えるのよ、ジョゼファイヌ！毎日アラムの前でだってなんとか笑顔作るじゃない！）

ぐつとこぶしを固く握り締め、その痛みでなんとか理性を引きとめた。

『私の可愛いジョゼファイヌ』ではなく『私（に富と栄光を運んでくれる）可愛い（お人形にしか過ぎない）ジョゼファイヌ』の言い間違いでしょ？と内心で毒を吐きながらラ「コット侯爵以下ブリュイエル家の親族の重鎮たちのお世辞を聞き流す。

「いやあ相変わらずの愛らしさ！見よ、頬など本物の薔薇の方が己を恥じて萎れそうだ」

「全く！これならば王子もお気に召そうぞ！」

「そうだな、これほどまでに可憐な姫君は社交界には居るまいて」

「あ、ありがとうございます、小父様」

持てる力の全てを発揮して、ジョゼは儂い笑顔を浮かべた『私の可愛いジョゼファイヌ』でありつつけようとした。

自分の見たいものしか見ようとしないうこの人達にわざわざ理想と違うことをつきつけたところで結局は面倒くさいことになって時間の無駄にしかない。なら、目的が全然わからないけれどとっと満足してもらってとっと帰ってもらおう。

ああでも、クリスが居たら小父様たちの相手も少しは楽になったのに！

「そういえば、クリスの姿が見えませんが……今日はクリスも城に上がったのでしょうか？」

「クリスは大手柄じゃ！今頃王子に気に入られておるわ！」

「あれもほんに如才ない。どうやって王子の気を引いたかは知らないが、社交界に出たばかりの王子が真つ先にあのクリスと話したいと

言い出すとは」

「事の次第はようわからんが、これで次代の王家とブリュイエールの絆も深まったというもの。後は……」

くすくすと顔を見合わせながら忍び笑いをする長老とその予備軍たち。にたにた笑いがこれほどム力つくものだったことを改めて思い知る結果になった。自分で自分を苛立たせていては意味が無い。ジョゼはクリスに話を向けた自分の失敗を認めた。

かくなる上は……

「それで、一体何の用があつてこんな夜更けにいらつしゃったんですか？他に話もないなら、私明日も学校がありますので失礼します」一瞬たりとも同じ空気を吸いたくない、と強引に話をまとめる方向に仕向けたジョゼを、押しかけた客たちは年の功でやんわりと宥めて引きとめる。

「そう急いては将来婿殿に呆れられてしまうぞ」

「そうそう、女に生まれたからには何時もにこやかにして家中を明るく……」

「——小父様方、私眠いので失礼いたします」

「いやいやいやいや、話はまだまだこれから、せつかく私の可愛いジョゼフィーヌに良い話を持ってきたのだから」

ウダウダ食い下がる小父様方に痺れを切らしてきびすを返しかけたジョゼに慌ててラ・コット侯爵が追いつがった。

それにしても良い話ですって？何の冗談よ？とジョゼは侯爵の言葉を鼻で笑い飛ばした。

物心がついてこの方、侯爵以下雁首そろえた親族たちから良い話を聞いたことなど絶対ない。

「なんですか？それは今すぐ小父様方が私をブリュイエル家の正当なる後継者として認めてくださるということでしょうか？」

「いやいや、その話はまた別の機会もあるうて。何せまだ一年猶予がある。それよりも、私の可愛いジョゼフィーヌももう十六歳。そろそろ社交界にデビューしても良い頃合ではないか？」

ラッコット侯爵から飛び出してきた単語に、ジョゼの眉が跳ね上がった。

社交界？今年一年卒業研究に忙しいというのに、貴婦人たちの間に混ざって詩歌音曲に心血注ぐようなそんな余裕がある筈無い！あったら勉強する！！

あれか？あれだ！ジョゼに対するいつもの主席奪取妨害工作だ！

「お断りします。私今年忙しいんです」

一瞬でジョゼは答えをはじき出し、にべもなく断った。

だが、そのくらいのことでめげるようなお優しい小父様方であるはずもなく。

急に、物分りの良さげな大人の風情になり、分らず屋の若者を諭す空気に雪崩れ込む。

「残念だがそれは許されんことだぞ、ジョゼフィーヌ」

「そうそう、今宵宴で小耳に挟んだのだが、ジョゼフィーヌよりもお若いマルグリッド王女殿下がもうじき社交界にデビューなさるそうだ」

「王女殿下は国王陛下にとって掌中の珠、目に入れても痛くないほどの可愛がりようと聞く」

「それにデビューに際し余計な虫がつくのを嫌って王太子殿下がエスコートを任されたとか」

「それほど大事にされておる姫君じゃからのう、交友関係にも厳しいのは当然じゃな」

「身元もしっかりした、間違いのない立派な貴婦人で、王女殿下と年も近く才気煥発にして王女自身もないがしろに出来ない姫と言えばジョゼフィーヌを置いて他にはおらんではないか」

「姉の如く王女に接し清く正しく導いてくれとは国王陛下のお言葉じゃ」

——一族の長老達に唯々諾々と従うことをよしとせず反乱を起こしている真っ最中のジョゼが王女を『清く正しく』導く役目につくのが本当に正しい選択かどうかはこの際とても疑問ではあるが、国王

陛下のたつての希望ならばジョゼに断る権限はない。これぞ完璧なるお膳立て。

ああ、これが今年最初の妨害工作だというのなら、受けて立とうじやないか。きつと立派に社交界と学業を両立させてみせる！

「そこまで望まれたのでしたら寧ろ望外の喜びですわ。是非、王女殿下の社交界デビューの場に居合わせたいものです」

につこり微笑む仮面の下で、ジョゼはぎゅっとこぶしを握り締めた。

「ムっカっつくうううううう！！！」

ジョゼの雄叫びのような叫びとともに暴走した魔力がどこかの研究室で研究中だった魔法薬の実験にでも共鳴したのか、微かに爆発音と、ガラスの飛び散る音、そして居合わせた学生らの悲鳴が聞こえてくるが、そんなことは気にしない。

なんだってこっちは人生の一大事だ。

「なんだってこんな大事な年に社交界なのよ！後一年逃げ切れればいくらかでも付きあってあげるのに、どうしてこのタイミングなのよ！邪魔邪魔、研究の邪魔だわ！！！」

ドン、ダン、ガシャーン！とジョゼの吼え声に合わせてそこら中で何かの破壊音がする。そう、例えば黒板がへこんだ音だったり、教卓の天板が真つ二つに折れた音だったり、天井の釣りランプが落下した音だったり。

ジョゼの居る八年生の教室は結構悲惨な光景になっていたが、アラムはその状況を気にすることなくべらりと昨日から読みふけている本を捲り、ついでに呟く。

「一々そんなことで目くじら立てるなよ。どうせ一晩不恰好に着飾ってくるくる回って愛想笑い浮かべてるだけだろ。それくらいのことに付き合ってやれないくらい度量が狭いとは……まったく、これだからお子様って奴は……」

「アラムったら！！貴方また私のこと子供扱いして！！」

きい！とアラムを怒鳴りつけた瞬間、ジョゼの真後ろで教室の

窓ガラス全てがバリバリバリ！！と悲鳴を上げて粉々に砕け散った。

「――馬鹿が。まだ肌寒い時期だって言うのに、何てことしやがる。だからガキだつての」

アラムから冷静な突っ込みが入って、ジョゼはハツとして周りを見まわした。

存在意味の無くなった窓の残骸、約八割が使用不能に陥った黒板、エトセトラ、エトセトラ。とりあえずこのままでは授業は不可能だろう。

外から吹き込む風が、心なしかいつもよりも冷たく感じる。

「まあまあ、アラム、この位姫の魔法ですぐに直せるんだからそこまでトドメ刺さなくても」

「お前がそうやって甘やかすから何時まで経っても周りの状況見れない、自分で自分もコントロールできないクソ餓鬼様に育つんだろ？直せば幾らでも壊しても良いってか？」

静かにキレルアラムを宥めるのにクリスは見事に失敗した。

にへら、と笑って、いやでも、直さないよりマシだね、というフオーになってるのかなってないのか判らないクリスの援護射撃を受けると、寧ろ追撃を食らったかのような精神的ダメージを味わって、ジョゼは更にいたたまれなくなった。

小父様たちの申し出がどんなに不愉快だったからって、魔力を暴発させて物に八つ当たりするだなんて、アラムに餓鬼と言われても仕方が無い。そんなのもう卒業したつもりだったのに。

むつつり黙々と物体修復の魔法陣を編み出しつづけるジョゼを尻目に、アラムは最後のページまで読み終わると前に座っていたクリスに話しかけた。

「で、本当にあんなジャリガキがマルグリッド殿下の指南役になるのか？逆じゃね？」

言外に、むしろあからさまに立場が逆だろうと言う空気にクリスは苦笑して頭を振った。

「ま、国王陛下のお心積もりでは、そういうことになるかな」

「買い被り過ぎだ。あいつに殿下の指南役？ 傍若無人の傍迷惑以外教えられるものはない！」

否定しようの無い事実をぐっさり指摘されても、ジョゼは反論することなく大人しく魔法で自分の壊した教室を修理するための魔法陣を編みつつける。

その横で、アラムはコホンと前置きをしておもむろに親友に話を切り出した。

「で、クリスは王女殿下に会ったことあるのか？ やっぱこう華奢で儚くてお姫様〜って感じ？」

「あれ、そんなに興味持つなんてどういう宗旨変えかい？ アラムは貴族が嫌いじゃ無かったっけ？ 君のことだから貴族も王族も変わらないと言っに違いないと思ってたんだけれどね」

目をきらきらさせて聞いてくるアラムにクリスが冷やかしかげに茶化すと、アラムは断然力を込めて断言した。

「俺だってこれでも人並みに王族に対する敬意ってやつは持つてるんだぜ。なんてったって王様が居なかったらこの国が出来なかったんだからな」

「僕や姫のご先祖様が居なくっても国は出来てないけどね」

「そうは言ってもやつぱり、思いつく人間が居なきゃ何も出来ないじゃないか。そう言う意味で王はまさにこの国を生み出した人だよ。この国のもっとも重要な人だろ？ その王位を継ぐ、かもしれない王女殿下、クリス会ったことあるのか！？」

「そんなに期待されてるところ悪いんだけど、僕はまだ会ったことはないよ」

意気込むあまり額がくっつきそうなほど迫ってきたアラムの鼻の頭に指をつきつけてクリスが肩をすくめて答えると、何だ使えねえ、とアラムが毒づいてまた元のだらけた姿勢に戻る。

「なんだ、ブリュイエールの一族の人間と言ってもそんなに偉くないんだな」

「違うよ。僕は確かにブリュイエールの末席に引つかかる程度の傍流だけど、たとえ本家当主、姫のお父上でもまだお会いしたことないと思うよ。王女殿下はまだ成人前の雛であらせられるからね。王太子殿下だつてこの間の立太子式まで一度も奥宮を出られたことは無かつた筈だし」

「……やっぱ王族ともなると面倒なことが多いのか？」

「多分ね。王族はとても血が弱いから。知ってる？長い歴史のなかで王冠を継ぐ子供は一人しか無事に成長しないっていう伝説があるんだよ。残っている記録を見る限り確かに現在の国王陛下の代までは真実だし、その分周りが過敏になるのも当然、かな」

「なんだそりゃ？やっぱこう、陰謀権術、とか泥沼王位争い、とか？」

「どうかな、殆どが死産或いは夭折だし、多分に医療技術のことも関係あると思うしね」

簡潔に過ぎる感のあるクリスの説明に成る程とアラムが頷く後ろで、ジヨゼが一声吼えた。

「どうも、申し訳ございませんでしたあああああああ！！」

……なんとも締まらない謝罪の叫び声と共に、ずっとちまちま練り上げていた魔術構成に怒涛の如く魔力が注ぎ込まれる。魔力の満ちたところから光が溢れ、見る見るうちに時間が巻戻るように壊れていた物があるべき場所へと舞いあがってゆく。

「ふう、イイ仕事をしたわ」

額の汗をぬぐう振りをしつつ一息ついたジヨゼの背後に、亡霊のような影がさす。

「……おいコラそこのクソ餓鬼」

「どう、アラム、私の華麗なる魔法で生まれ変わった新しい教室は？」

「『どう？』じゃないだろ！真性の阿呆がお前は！！」

アラムは怒鳴ると同時に手近にあったノートで殴りつけた。

「元の教室じゃないだろ！こんなキラッキラなところで勉強できる

かボケ！」

思いつき握り締めたこぶしを机に叩きつけてアラムは周囲の被害状況を指差した。

ジヨゼの魔力の暴走で木っ端微塵に吹っ飛んだ窓はガラスが嵌め込まれると同時に優美な唐草模様が絡んだ真鍮の補強枠があてがわれ、ほぼ壊滅状態に追い込まれた黒板はあらゆるところに銀装飾の女神像があしらわれる。天板真つ二つで意味の無くなった教卓はいかにも鋸有り合わせで切って作りましたという直線直角一本槍のデザインから職人技を思わせる上品な曲線を描く猫足テーブルに姿を変え、明かりさえ取ればいいという意思がひしひしと伝わってくるような大量生産工業品の代表格のようなランプは水晶を磨いたようなクリスタル製のシャンデリアに取って代わられていた。

——壊した物を元に戻すくらい簡単なのに、何に時間をかけているかと思つたら！

「いいじゃない、常々魔法学校つて飾りに欠けると思つてたのよね。美しい物に囲まれて精神的に豊かな生活を送ることは勉学をより深くするために必要なことだと思ふのよ」

怒りの余り二の句がつけずにプルプル震えるアラムの横を小走りに駆け抜けて、クリス、もといジヨゼの奴隷が彼女の前に跪く。

「ああ、姫、私も何時もそのように感じておりました！なんとあれば潤い少ない学生生活に一輪の華を添えるのは我等持てるものの定め。持たざるものにあるべき理想の生き方の薰陶をくれてやる姫のお優しき計らいに私魂が打ち据えられるほどの衝撃を受けました！斯くなる上は私も姫を見習い学院内の美化に勤める所存……」

「やめんかこの金持ち貴族どもが！」

とうとうと語りつづけるクリスを蹴倒して、アラムは深い深い溜息をついた。

「お前等無の美という物を知らないのか！？一切の無駄を排除した機能美と単純構成の反復が生み出す美しさを理解しないから貴族どもは無駄にゴテゴテ飾り立てて醜くなつていくんだ！今からジヨゼ

の社交界デビューの滑稽な姿が思い浮かぶぜ！」

「滑稽ですって！見ても無いのにそんなことを言うだなんて、根拠のない事柄を断定口調で話す人間は愚か者の極地よ！ねえ、クリスからも何か言ってよ！私酷い格好してないわよね？」

「それはもう、姫の美しさは私の魂を捕らえて離しません！」

陶醉した目で答えたクリスを受けて、ジョゼはふん、と鼻を鳴らし、アラムを振りかえった。

「どうよ、何度も私の正装見てるクリスの意見は？」

「証言能力あるか！クリスはお前のこと何時も常に全肯定だろうが！！！」

アラムに事実を指摘されてジョゼはうつと言葉に詰まった。

いや、確かにそれはそうなんだけど……

「じゃあ、社交界デビューのときにはアラムにも私の格好見せてあげるわよ！」

「おうおう、見せる見せる、指差して笑ってやるから！」

火花が飛び散りそうなほど睨み合う二人を、クリスはすうっと目を細めて眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653i/>

空ノトリカゴ

2011年12月17日12時46分発行